

## ねがいのいえニュース 第50号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2018年4月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail [negainoie@r6.dion.ne.jp](mailto:negainoie@r6.dion.ne.jp) Hp <http://www.negainoie.com>



みなさまお元気ですか？ねがいのいえは最重度の人を支えるグループホームの完成が1年後に決まったところですが、困窮する家庭が次々と現れているため、次に計画していた2軒目を前倒して年内に建てることになりました。困っている人を24時間年中無休で支える形で15年前スタートしたねがいのいえが、出会った人の生涯に寄り添う段階に進む時が、ようやく来ました。

### 出会った人の生涯に寄り添う

2年ほど前、ある団体からねがいのいえの実践を聴きたいという要望が寄せられ、講演をしたことがありました。24時間支援する中で目撃した様々な人生ドラマのエピソードをいくつか語ったところ、聴衆から「こんな事業所があることに衝撃を受けた」と感想をいただきましたが、先日その時の方たちに久々にお会いしたら、「あの時は喉に刃物を突きつけられた」と言われました。

私たちにとって24時間の支援は当たり前に行っていることで、何ら特別なことと思いません。そしてそれが当然という環境で仕事しているスタッフたちは、たとえ高卒で資格がない人でも、当たり前で最重度の人たちと一緒に宿泊し夜間のケアを問題なく行います。入浴して夕食を食べてゆっくり眠るという、人間として当たり前の行為をただシンプルに行うだけです。そのどこに特別なことがあるのか、逆に問い返したい気がします。

しかし現実には、児童デイや生活介護等、日中活動系の事業者の多くは、自分の営業時間のみにコミットし、営業時間外の支援は考えていません。しかし、利用者のご家族の生活は24時間であり、本当の困り感は営業時間外に起きていることでしょう。福祉とは、最初から24時間営業が大前提なのだとは自分は思っています。

昨年の秋ごろ、小学1年生の女の子が母の緊急入院によりショートステイを探しているという相談が、支援センターから来ました。父は仕事の都合上、思い通りに早い時間に帰宅することが出来ないということでした。毎日利用している放課後デイのスタッフがデイ後に送って来てくれるので、何とかお願いしたいという話でした。

ふだんから満員のショートステイですが、苦心して体制を整え受け入れてみると、片半身に軽い麻痺はあるものの、知的にはほぼ障害はないに等しい女の子で、一緒に宿泊したスタッフは、「おしゃべりして笑って、ただただ楽しい夜でした」と語っていました。

出会った人の困りごとに寄り添うという考えの私たちなら、たとえショートステイの指定がなくても、放課後デイのスタッフの誰かが、夜を一緒に過ごしてあげたのだらうと思いました。それは何も難しいことではありません。介護保険の中にも、小規模多機能という制度があり当たり前に行っていることです。



出会った人の困りごとに寄り添う、という福祉の原点に、もう一度、全ての事業者が立ち返って欲しい、そして、入所施設はこれ以上作らないと国が宣言した今、出会った人の生涯に寄り添うという想いが、今、われわれ事業者に求められている、と思います。

ねがいのいえはご家族へ、「20歳になったら自立しましょう」「子どもは親の所有物ではない。子どもには本人の人生がある」と訴え続けてきて、親が倒れる前に親子が離れて暮らす心の準備を促してきました。そして、家庭の状況を毎年のように確認し直し、それぞれの希望や入居者同士の相性などを考慮し何度も計画を練り直して、誰が何年後にどのホームなら暮らせるかを考え続けてきました。そして先日、その結果を各家庭にお知らせしました。

グループホームは急に用意することは出来ないの、何年もかけて緻密に計画して進めなければなりません。しかしその作業を地道に積み重ねれば、この業界において決して大規模な有力団体ではない私たちであっても、重度者50人のホームを用意することは可能です。ねがいのいえよりもっと大規模で成長の速い法人は世の中にごまんとあります。私たちよりもっと大きく速く展開できる団体はたくさんあるはずです。

われわれは福祉であり、税金で生かされている身です。「利益の出ないことはしません」「営業時間外は知りません」とは言わずに、全ての事業者が、「出会った人を24時間支え、生涯に寄り添う」を実現してほしいと願ってやみません。

### 建貸オーナー情報

**さいたま市大宮区・さいたま市中央区・上尾市** に、グループホームを建ててくださるオーナーがいらっしゃるとい情報が届いています。関心のある方はご連絡ください。

[negainoie@r6.dion.ne.jp](mailto:negainoie@r6.dion.ne.jp) 藤本 まで

### ねがいのいえ保育園オープン

今後グループホームを展開していくに当たって、人材の確保が最重要課題になることは明らかです。人材確保の一手にとしようという思いから、5月より保育園を開園しました。

先日知人から、都心の繁華街の中に一軒家でおこなっている24時間の保育所がある、とうかがいました。シングルマザーの方たちが夜間に子どもを預けて居酒屋などで働くのだそうです。認可外で子どもたちには決して良質とは言えない環境ですが、それでも定員は常にいっぱい、入れない人が多いのだと言います。小さなお子さんを抱えて日中のパート勤務では十分な収入を得られず、夜の仕事を効率良く稼ぎたいという思いがあるのではないかと思います。つまりそこには、貧困の

問題が潜んでいます。

今この国では、生活困窮者支援法ができて、貧困の問題にスポットが当たり、子ども食堂や学習支援などが大盛況です。それはまるで一過性のブームのようにさえ思える加熱ぶりですが、貧困を根本的に改善するのなら、シングルマザー等の人たちが目いっぱい働いて十分な収入が得られるようなシステムを創ることが必要であることは明らかです。

片や福祉業界はどこも人が集まらず、特養を建てたがオープンできないなどの問題がニュースでも流れています。そこで、新しくスタートさせた保育園事業をいずれは24時間保育まで拡大して、宿泊スタッフの確保までつなげたいと思っています。繁華街の仕事も立派な仕事だとは思いますが、お子さんたちにより良い保育環境を提供し、ママたちも正規で雇用され夜勤手当がついて十分な収入を得られ、さらに休日もきちんと確保されたら、きっと喜ばれるのではないのでしょうか。宿泊スタッフが足りなくてグループホームが広がらないと嘆いている福祉業界にとっても救いの一手となるでしょう。

今後の事業展開の鍵を握るのは、間違いなく保育園事業になると確信しています。みなさんも始めませんか？



## ソマティック心理学との出会い

トラウマ解放の心理学を学ぶ3年間のプログラムを、先日卒業しました。学ぶ意欲の高い臨床心理士が集まるその場所は、最高に心地よいコミュニティでした。困っている人、悩める人を、決して見捨てずあきらめずに、地道に支援し続ける心理士たちの熱意は、今まで出会わなかったことが不思議なほど、魂を共有する仲間だと思えました。

学びの発端は、学校や他の施設では手がつけられないと言われた激しい行動障害の方たちが、ねがいのいへの「心のケア」によってみんな穏やかに落ち着いてゆきますが、その中に、どうしても癒しきれない人がいるのを感じたことでした。今まで学んできたことだけでは足りない何かが、心の世界には存在するらしい。私たちはもっと学ぶべきことがある、と思いました。

悲しみの原因を探す、あるいは、原因はわからなくてもその感情に共感し寄り添う、などの方法で癒してきた私たちの「心のケア」とは違い、原因も感情も探らず、ただ体の感覚にフォーカスしながら、神経系の波をゆるやかにしていくという方法でした。体の感覚に働きかけるその心理学は、ソマティック心理学（身体心理学）と呼ばれています。共感というよりも共鳴によって、癒しがオートマチックに進行するという驚きの方法は、言葉の壁を超えます。重度の障害者と出会う心理士は少ないが、むしろ重度障害者向きなのではないかと思いました。

3年の学びを終えて、自分が持っていた課題にはほぼ回答を得ました。今まで癒しきれなかった人たちの心の中に何かがあるのか？それはおそらく、遠い過去の日の記憶にさかのぼります。生まれたその日、その瞬間かもしれないし、生まれる前の記憶かもしれない。頭の中に残る記憶ではない。両親も自覚していない、何らかの異変が胎児の体に起きて、その時の恐怖が脊髄に刻まれたのかもしれない。その体に刻まれた恐怖が、母と一瞬でも離れただけで泣き続ける、あるいは、少しの

動揺で自分の顔を叩きつづける自傷行為を引き起こす。

それはもちろん誰も悪くないことです。そしてそれに対して何をしたらいいのかも、3年かけて訓練を積みました。今後も様々な先生が最新の方法を携えて来日される予定で、学びに終わりはありませんが、ひとまずこれで旅は終わり、これから実践と収穫あるのみです。

## 認定研修制度を提案します

一方、国はこの3年間、現場職員へ行動障害研修の受講を強力に推進してきました。行動障害と言えは様々な人がいるはずですが、内容は自閉症への構造化が中心であり、この研修だけでは問題は解決しないと語る人が少なくありません。そして指定事業となった今、受講してきたスタッフが「びっくりするほどテキストを読むだけだった」と呆れる返る状況も生まれています。

支援費制度から15年、前進を続けてきた障害福祉界ですが、障害の多様性を認めよう、という掛け声とは裏腹に、多様な障害特性に様々なアプローチがあることは認められず、行動障害研修のみが唯一の評価基準になろうとしていることは、逆に障害福祉の危機かもしれません。

臨床心理士の世界では、資格の更新には様々な勉強会に参加してポイントを貯めることが義務づけられているようで、そのポイントが付与される講座は認定制になっています。新しく生まれたメソッドでも認定される講座は数々あり、最新の技術も積極的に採り入れようという心理士界の気概が感じられます。障害福祉界も見習ったらいかがでしょうか？受講したらポイントが付与される講座として、「構造化」も「動作法」も「PECS」も「筆談」も「感覚統合」も「ムーブメント」も「心のケア」も「コロロメソッド」も「ソマティック心理学」も、幅広くあったらいいと提案します。

## トラウマケアの拠点がスタートしました

ソマティックの勉強会で出会った優秀な心理士である秋元翔一氏に、ねがいのいへの児童デイを利用する発達障害の子たちが一年間セッションを受けてきました。発達障害のあるお子さんは体の使い方が不得手なことが多く、体の機能を高めるだけで激しい感情をコントロールできるようになるそうです。1年かけて自転車に乗れるようになった中学生の男の子は、みちがえるように大人になったとスタッフが語っています。また、わが子のセッションを見て母も受けてみたいと希望されることがあります。ご家族もまた自分のトラウマに向き合い、ひとつひとつクリアになるうちに、子ども自然と落ち着いていくことはよくある、と秋元心理士は語ります。



その秋元氏が、「日本ではまだ珍しいトラウマケア専門のセンターを作りたい」という夢を語られたので、「ねがいのいへの事業として始めましょう」と提案しました。そして「トラウマトリートメントセンター『リソース』(TCR)」がスタートしました。

<https://saitama-traumahealing.jimdo.com/>

手伝いたいという心理士も続々と集まっています。この小さな相談室から、日本全国へ、そして世界へ、トラウマを癒せば自分も世界も幸せになれることを、発信してゆきます。